

目次

I	序文	14
II	プレスター・ジョンがいと気高き皇帝フェデリコに送った高貴な使節について	16
III	王が投獄した賢いギリシア人がいかに駿馬を評価したかについて	19
IV	ある吟遊詩人がアレクサンダー大王の御前である騎士について泣きついた話	22
V	ギリシアの使節への返書のある王様とその若い息子に託した次第	25
VI	いかにしてダヴィデ王に部族の数を知りたいとの考えが起きたのか	27
VII	天使がソロモンに話しかけ、主なる神が彼の息子から その罪のために王国を取り上げたと話した次第がここで語られる	29
VIII	どうしてある王の若殿が追放されたシリア王へ贈り物をしたか	32
IX	煙売買	35

- X ここでは領民と巡礼者の間でパーリの下僕が述べた素晴らしい裁定が話される 37
- XI ジョルダーノ先生が邪な弟子に裏切られた話 39
- XII アミナダブがダヴィデ王に敬意を表した話 40
- XIII ここでは、楽しみのためにシターンを弾かせた  
アレクサンダー大王をアンティゴヌスが叱責した様子について語る 41
- XIV ある王様が自分の息子を十年間、暗い場所で養育し、  
その後息子にあらゆる物事を見せた結果、女好きになってしまった次第 42
- XV ある国の王とその息子が法の順守のために片目を取られた顛末について 43
- XVI 聖パオリーノ司教の深い慈悲について 44
- XVII ある両替商が神のために行った偉大な施しについて 45
- XVIII カルロ大帝の男爵に神が下した裁きについて 46
- XIX 若王の偉大なる寛大さと礼節について 47

XX	イングランド王の偉大な寛大さと礼節について	49
XXI	三人の魔術師がフェデリコ帝の宮廷にやってきた次第	53
XXII	皇帝フェデリコから大鷹がミラノの市街へ逃亡した顛末	56
XXIII	フェデリコ帝がある泉のところまでひとりの庶民に出会い、 (水を) 飲んでも良いかと尋ね、皇帝がその者の杯を取った次第	58
XXIV	皇帝フェデリコが二人の賢人に質問して彼らに報酬を与えた経緯	60
XXV	スルタンがある者に二百マルクを与え、 それを彼が見ている間に宝物管理人が書きつけた次第	62
XXVI	ここではフランスのある市民について語られる	64
XXVII	侮辱された偉大な君主についてここで語られる	66
XXVIII	ここではフランスの王国にあったある慣習について語られる	67
XXIX	賢明なる占星術師が最高天について議論した様子についてここに語られる	69

XXX	ロンバルディアのある騎士が財産を使い果してしまった話	71
XXXI	ここではアツォリーノ殿の物語の物語師について語られる	73
XXXII	アイルのリカール・ロゲルチヨの勇敢な行為について	75
XXXIII	ここではバルゾーのイムベラル殿にまつわる話が語られる	77
XXXIV	二人の高貴な騎士が素晴らしい愛情で互いに結ばれている様子	79
XXXV	ポローニャのタッデオ先生についての話	81
XXXVI	残忍な王がキリスト教徒を迫害した様子について語られる	82
XXXVII	ここではギリシアの二人の王の間にあったある戦争について語られる	84
XXXVIII	ある女から咎められたメリススという名の占星術学者について	85
XXXIX	ある修道士にからかわれた司教アルドブランディーノについてここで語る	87
XL	サラディーノという名の道化師について	88



- LII ジョヴァンニ王の時代に買われた鐘について 105
- LIII ここでは皇帝が彼の男爵のひとりに与えた特別な許可について語る 106
- LIV ここでは教区牧師ボルチェッリーノが告訴された経緯について語られる 107
- LV マルコという名の吟遊詩人の話について語る 108
- LVI ある田舎人がボローニャへ学問をしに行つた次第 109
- LVII ボローニャの貴婦人アネジーナ 110
- LVIII 宮廷騎士ベリウオロ殿について 111
- LIX 皇帝が絞首刑に処したある騎士についてここで語られる 112
- LX ここではカルロ大王が恋狂いした顛末について 115
- LXI 哲学者ソクラテスについて、そして彼がギリシア人に返答した様子についてここでは語られる 118
- LXII ここではロベルト殿の話が語られる 120

LXXIII	立派なメリアドゥス王と怖いものなしの騎士について	122
LXXII	プロヴァンスのピュイ宮廷で起こったある物語について	124
LXXI	イゾルデ王妃とレオーニスのトリスタン殿についてここで語る	130
LXX	ここではディオゲネスと呼ばれた哲学者について語る	133
LXIX	ここではパピリオの父が彼を元老院会議へ連れて行った経緯が語られる	134
LXVIII	ある青年がアリストテレスにした質問について	136
LXVII	トラヤヌス帝の偉大な正義についてここで語られる	138
LXXVI	ここではヘラクレスが森の中に行った経緯が語られる	140
LXXV	息子に死なれたある婦人をセネカが慰めた様子をここでは語る	142
LXXIV	カトーが〈運命〉に対し不平を述べた次第についてここで語る	144
LXXIII	お金に困ったスルタンが正当な理由もなくユダヤ人を告訴した顛末	146

LXXXIII	LXXXII	LXXXI	LXXX	LXXIX	LXXVIII	LXXVII	LXXVI	LXXV	LXXIV		
	キリストがある日弟子らと木の生い茂った場所を 歩いていると、じつに貴重な宝を見つけた経緯について		湖のランチャロットを愛したため亡くなられたスカロット（シャロット）の乙女について語る	ここではトロイアのプリアムス王の息子らが開いた審議について語られる	フィレンツェのミリオレ・アバーティ殿が口にした物語についてここで語られる	ここでは彼の領主を崇拜する旅芸人について語られる	学問を俗語に翻訳することに熱心なある哲学者の話	ここでは宮廷に出入りする騎士リニエリ殿について語られる	リツカルド（リチャード）王の行った大虐殺についてここで語られる	ここでは、主なる神が旅芸人にお伴される顛末が語られる	ある臣下と主君の物語がここで語られる
	165		163	161	159	157	156	154	152	150	148

XCIV	XCIII	XCII	XCI	XC	LXXXIX	LXXXVIII	LXXXVII	LXXXVI	LXXXV	LXXXIV
ここではメギツネとラバについて語られる	告解に出かけた農夫の話	うまそうなパイを作った女房の話	ある男が司祭に告解をした次第	ここではフェデリコ皇帝が彼の鷹の鷹の一匹を殺した顛末が語られる	終わる見込みのない物語を始めた吟遊詩人についてここで語る	ここではマントヴァのカツフェリの城主殿について語られる	ある男が告解に行く	過分に与えられたある男の話	ジェノヴァで時折り起こった大飢饉について	エツォリーノ殿が大祝宴を宣言させた様子
180	179	178	176	175	174	173	172	171	170	167

XCIV 町に出かけた田舎者の話 182

XCVI サン・ジョルジヨのビートとフルツリ・デイ・フィレンツェ氏の話 183

XCVII ある商人が海の彼方へ二枚の桶板で区切った樽でワインを運ぶ顛末が語られる 186

XCVIII 帽子を仕入れた商人について語る 187

XCIX ある愛の美しい話 188

C フェデリコ帝がヴェッキオを訪ねた次第 191

解題 192

訳者あとがき 198

参考文献抄 214

完訳 中世イタリア民間説話集

本書では、古のあまたの偉大な人びとによる高尚な会話、優れた行為、立派な返答、拔きん出た勇氣ある行い、そして素晴らしい贈り物について語っております。

## I 序 文

われらの主イエス・キリストが人間の姿でわれわれに語りかけたとき、とりわけ心からあふれ出ることを、口が語るものであるとそのお方は仰いました。<sup>(1)</sup> 他人より寛大で高貴な心を持つあなたがたは、神の歎びにたいしてあなたがたの心と言葉を整えてください、主がわれらを創造し、われらが主を愛する以前にわれらを愛してください。主について語り、主を敬い、主を畏れて。もし、ある部分において、主のお気に召さないことなしに、われらの身体を喜ばせ、助け支えるために話すことができるならば、威儀と寛容をもってあなた方ができうることをなさいませ。言葉においても行いにおいても寛大で高貴な方々は身分の低い者らにとつてまるで鏡であります。彼らの言葉は、より繊細な器官からでてくるので、より優雅なのです。ゆえに過去に多くなされた修辞、公正な儀礼、洗練された返答、立派な行いと素晴らしい贈物について思い出してみましよう。ですから、機会があれば、それらについて知らない、あるいは知りたいと望む方々のため、そして喜びのために、高貴な心と高き知性をお

持ちの方はやがて然るべき時にこれらを真似ることや、議論し、口に出したり、物語ったりできましよう。そして仮にわたしたちがお示し致します言葉の華が多く別の言葉と混じっていたとしても、お腹立ちなさらないうたいただきたく存じます。というのも黒色は金色を良く見せるものでありますし、時には見た目にも美しく上品な果実のために果樹園全体が好ましくおもえることもございます。そして数輪の美しい花が庭全体を飾ることもございますゆえに。

また、今までに美しい表現を口にしてこれなかつたり、そういった言葉によって何ら恩恵を与えることなく今まで過ごされてきた多くの読者諸氏が、ここに語られていることにご立腹なさいませぬようお願い申し上げます。

(1) 「ルカによる福音書」 6:45 参照。

(2) シチリア派の詩人ジャコモ・ダ・レンティニによる *Amando lungamente* という詩にも同様の表現: *che per un frutto piace tutto un orto*, 「ひとつの果実のために、果樹園全体が好きになる」が見られる。瀬谷幸男・狩野晃一(編訳)『シチリア派恋愛抒情詩選』「VI片想い」(四四―四六頁)を参照。

## XI ジョルダーノ先生<sup>(1)</sup>が邪な弟子に裏切られた話<sup>(2)</sup>

ひとりの医者がおりました。名前をジョルダーノといい、彼には弟子が一人おりました。ある王様の子息が病にかかりました。そのお医者は王のもとへ行つたところ、彼が回復するのは明らかでした。しかし弟子は師匠の評判を落とすために、その父王に言いました。

「御子息様の助かる見込みはございません」と。師匠と言ひ争いをしていると、弟子は病人の口を無理やり開け、小指でもつて舌に毒をつけたのです（舌に関してよく知っていると云う素振りをして）。すると彼は死んでしまいました。その医者はその場を立ち去り、彼の評判は落ち、弟子は患者を奪つてしまいました。その後、その先生はロバしか診療しないと心に決め、四足獣や小さな動物などを診たのでした。

(1) この人物はカラブリアのジョルダーノ・ルッフォ Giordano Rufo であると特定されている。『馬の治療について』 *De cura equorum* の著者。フェテリコ二世に随行した獣医<sup>(1)</sup> Marescalcus totius regni Siciliae の位を有するまむになつた。

(2) Lo Nigro と Segre は、この話の種本となつてゐるのは *Trattati di mascalcia attribuiti ad Ippocrate Tradotti dall'arabo in latino da Maestro Moise' da Palermo vulgarizzato nel secolo XIII* とある。

## 解題

ここに『中世イタリア民間説話集』として訳出した物語・説話集は、もともと十三世紀末のトスカーナで様々な素材から集められて纏められたものである。

### i. 作者・編者について

作者は一人であったのか、あるいは複数であったのかは判然としない。また、作者が編者であったのか、作者と編者が別であったということについてもわかっていない。ただ現存する作品から、わずかながら作者の輪郭を——かなり漠然としてはいるが——描くことができる。作者はもととフイレンツェの人で、聖職につくものではなく、俗人であったと推察される。フエデリコ帝（二世）がよく登場し、彼のソネットを引用している箇所があることから、作者はギベリン党に属する人であったと考える者もいるが、同時にサラディンあるいは英国のリチャード獅子心王ライオン・ハートに対する扱いを見ても、ことさら悪いこともなく、各話の標題通りのことを求めていた作者を想定する方が無難かもしれない。

## ii. 写本・刊本について

『ノヴェッリーノ』の現存する写本は7つ、刊本が一冊あるが、原本は残っていない。ただし残されている話数は写本ごとに大きく異なる。一〇〇話収録しているものは一五二三年に写された Biblioteca Apostolica Vaticana 3214 (V写本)とカルロ・グアルテルツィ (Carlo Gualteruzzi) 編集による一五二五年刊の editio princeps のみである。Editio princeps の順序通りに話が並んでいるのは(1) Palatino 566 (A写本：十四世紀前半、四十二話収録) (2) Gaddiano rel. 193 (G写本：一三二五年以降、三十話収録) (3) Magliabechiano-Stroziano, class XXV, n. 513 (十四世紀後期、十五世紀初頭、五十三話収録) (4) Codex Pluto 90 sup. 89 (I写本：十五世紀終盤、二話収録) (5) Pancaichiano-Palatino 32, section II, 138 (P2写本：十四世紀中葉、二十七話収録) である。異なる順序で話が並んでいるのは Pancaichiano-Palatino 32, section I, 138 (P1写本：十三世紀後半、十四世紀初頭、八十五話収録) の一写本のみである。一〇〇話収録の初の刊本 editio princeps にはおそらく人文主義者ピエトロ・ベンボ (Pietro Bembo) が深く関わっていると思われる。彼は俗語の研究に専念していたことで知られているが、イタリア語で書かれた作品の重要性に気づき、一五二三年にジュリオ・カミッロ・デル・ミニオ (Giulio Camillo del Minio) に依頼して写本を作らせた。これが Vaticana 3214 写本である。刊本の編者グアルテルツィとベンボは知り合いで、ベンボのラテン語による著述を翻訳したこともあり、この話集のことを彼から聞いていたのかもしれない。もう一人の人文主義者ジョヴァンニ・デッラ・カーザ (Giovanni Della Casa) は実際、グアルテルツィの計画を励ますだけでなく、経済的な面からも援助を惜しまなかった。

## 訳者あとがき

本書は作者不詳の総計百篇の短篇物語から成る中世イタリア民間説話集『イル・ノヴェッリーノ』*Il Novellino*の完訳である。翻訳の底本として*Il Novellino a cura di Valeria Moucher, con introduzione di Lucia Battaglia Ricci, Biblioteca Universale Rizzoli, 2008*に依拠して、さらに Joseph P. Consoli (ed. & tr.) *The Novellino or One Hundred Ancient Tales. An Edition and Translation based on the 1525 Guarteruzzi editio princeps.* Garland Publishing, Inc., 1997. を適宜参照した。

本書『ノヴェッリーノ』は別名『古譚百話』(*Le Ciento Novelle Antike*)とも呼ばれるイタリアの民間説話集の一つで、単純素朴で簡明な口語体で書かれた百篇の短篇物語から成る短篇集であり、イタリア文学史の上で最古の独創性に富む小話集の一つとされる。しかし、その作者あるいは編者の名前は不詳であるが、神聖ローマ皇帝にしてシチリア王兼エルサレム王のフェデリゴ二世が多くの物語群に主人公として頻繁に登場することから、皇帝派に属するフィレンツェ人とする説もある。さらに、本書の制作年代は一二八一年から一三〇〇年頃のいわゆる‘Ducento’に属する作品である。たしかに、この書よりも以前に編纂された同種の短篇集として、例えば『昔

の騎士の物語集』 *I conti di antichi cavalieri* や『七賢人の書』 *Il libro dei sette savi* (いずれも十三世紀中葉頃) 等が存在するけれども、これらはいずれも当時のラテン語やフランス語で書かれた種々の物語の紹介や模倣、またはその翻訳か翻案したものにすぎない。しかし、この『ノヴェツリーノ』はこうした外国の典籍からの影響を巧妙に吸収消化し、イタリア人読者(聴衆)層のために特別に編纂された最初の俗語による散文物語集と言われる。しかしながら、この作品はその獨創性によって現在ではイタリア散文学史上で紛れもない「正典」の地位を確保しているが、当初は広くイタリア語散文の規範とされたボッカッチョの大傑作『デカメロン』と対比されて、未熟で稚拙な作品と見做されて、その作成・編纂から二百年以上の間、不当にも過小に評価されてきたのである。しかし、後述するように、この『ノヴェツリーノ』は十個のテーマから成って、いわゆる「コルニチエ 粹物語」の形式を取るといふ説もある。すると、本書は既に『デカメロン』に近い構成を持っていたことになろう。

本書の原物の写本は伝存しないが、断片を含めて収録される物語の数は著しく異なる八点の写本群が伝存する。これら八点の写本群のなかで、一五二五年にカルロ・グアルテルツィがある写本から始めて校訂した「初版本」 *editio princeps* と、その二年前の一五二三年にイタリア・ルネサンス期の詩人、人文主義者、ローマ・カトリックの枢機卿でもあったピエトロ・ペンボが自身のためジュリオ・カツミリツォ・デル・ミニオに筆写させた写本(この写本は現在 Cod.3214としてヴァチカン図書館に所蔵されている)には全く同じ数の百話集が掲載されていることから、グアルテルツィとペンボの二人が使用した写本は同一であった可能性が高いと推定される。

この人文主義者ピエトロ・ベンボ（一四七〇—一五四七）はフィレンツェを中心としたトスカ  
ーナ方言の美しさに心底から強く魅了されて、彼の著書『俗語の散文』*Prose della volgar lingua*  
(1525)のなかでボッカッチョの『デカメロン』の文章を近代イタリア語の規範として体系化する  
ことに大きく寄与した人物である。また、彼の初期の作品で、彼は三人の貴婦人と三人の貴公  
子らにいわゆる「宮廷風恋愛」を主題にして、新プラトン主義者の立場から愛を論じて推奨する  
『アーツロの人びと「談論」』*Ghi Asolani* (c.1497-1502)を著している。（仲谷満寿美氏の邦訳が  
二〇一三年に「ありな書房」から出版された。）しかるにその一方で、フェラーラ公アルフォンソ  
一世・デステの公妃で恋多き「魔性の女」<sup>フアムフラターレ</sup>の悪名高きルクレツィア・ボルジアと肉体的不倫関係  
を持ちながらも、二人の間に取り交わされた四十三通の往復書簡が「世界で最も美しい書簡集」  
として後世に遺されている。

しかし、この人文主義者にして枢機卿のピエトロ・ベンボがイタリアの俗語文学研究に専念す  
るなかで、この『ノヴェッリーノ』の古い写本に遭遇して、この俗語の短篇集の価値を最初に重  
要視して、一五二三年にこの物語集の写本を転写させたのは驚くに当たらないだろう。

こうして、その二年後の一五二五年に、ピエトロ・ベンボの親友で、彼のラテン語作品の翻訳  
者として彼に仕えたカルロ・グアルテルツィが本書を『古譚百話』*Le Ciento Novelle Antike*の  
題名で校訂した「初版本」*editio princeps*をボローニャのベネデッティ社から出版した。

カルロ・グアルテルツィの「初版本」である『古譚百話』の出版のために、財政面のみなら  
ずさまざまな援助を惜しまなかったのはペトラルカ風の六十四編の詩編を書いた同じく詩人で

人文主義者であったジョヴァンニ・デッラ・カーザ（一五〇三—一五五六）その人であった。彼はカロの「初版本」の出版に積極的に関わり、本書の題名を『古譚百話』 *Le Ciento Novelle Anike* から今日知られる『イル・ノヴェッリーノ』 *Il Novellino* と表題を変えたことでも知られる人物でもある。

このようにして、この『ノヴェッリーノ』の作者・編纂者は俗語の散文学の大きな目標を推進した。そして、イタリア文学の散文の伝統を大いに称揚して、このジャンルの散文を韻文（詩）と互いに補完し合うことを宣言して、俗語による散文を詩（韻文）の「姉妹芸術」として研究と風格のある生産に値することを一般大衆に知らしめたのである。その結果、韻文（詩）の主題は伝統的に「恋愛」審美学とその神秘性に焦点を当てる一方で、散文の主題は大幅に拡大して、恋愛以外の多くの人間感情や様々な徳目と赤裸々な欲心をも含むことになるのである。

現代イタリアの文献学者、詩人、文芸批評家のグイド・ファヴァティやチェザーレ・セグレらと併称されるジョアン・ホール (Joan Hall) は学会誌 *Italian Studies: Volume 39, Issue 1, 1984* に掲載した論文「ノヴェッリーノの構造」『*Organization of The Novellino*』のなかで、曜日によって話のテーマが決められるボッカッチョの『デカメロン』の「枠物語」の構成と対比して、この『ノヴェッリーノ』の百話に各十話ずつに、十種類のテーマを分類している。（このテーマの分類の詳細については本書の解題を参照のこと。）

これらの綿密なテーマの分類の当否は別にして、これらの主題の範疇は大部分が従来の韻文（詩）の伝統にはなかったものであり、極めて広範囲で多様性に富む主題を扱っていることがよ

## 訳者

瀬谷 幸男 (せや・ゆきお)

1942年福島県生まれ。1964年慶應義塾大文学部英文科卒業、1968年同大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了。1979～1980年オックスフォード大学留学。武蔵大学、慶應義塾大学各兼任講師、北里大学教授など歴任。現在は主として、中世ラテン文学の研究、翻訳に携わる。主な訳書にA.カベルラヌス『宮廷風恋愛について—ヨーロッパ中世の恋愛指南の書—』(南雲堂、1993)、『完訳 ケンブリッジ歌謡集—中世ラテン詞華集—』(1997)、ロタリオ・デイ・セニ『人間の悲惨な境遇について』(1999)、G.チョーサー『中世英語版薔薇物語』(2001)、ガルテウス・デ・カステリオネ『アレクサンドロス大王の歌—中世ラテン叙事詩』(2005)、W.マップ他『ジャンキンの悪妻の書—中世アンティフェミニズム文学伝統』(2006)、ジェフリー・オヴ・モンマス『ブリタニア列王史—アーサー王ロマンス原典の書』(2007)、同『マーリンの生涯—中世ラテン叙事詩』(2009)、『放浪学僧の歌—中世ラテン俗謡集』(2009) (以上、南雲堂フェニックス)、P.ドロシケ『中世ラテンとヨーロッパ恋愛抒情詩の起源』(監・訳、2012)、W.マップ『宮廷人の閑話—中世ラテン綺譚集』(2014)、『シチリア派恋愛抒情詩選—中世イタリア詞華集—』(2015)、『アーサーの甥ガウエインの成長記—中世ラテン騎士物語—』(2016) (以上、論創社)がある。また、S.カンドウ『羅和字典』の復刻監修・解説(南雲堂フェニックス、1995)、その他がある。

狩野 晃一 (かのう・こういち)

1976年群馬県生まれ。1999年駒澤大学文学部英米文学科卒業、2005年同大学大学院人文科学研究科英米文学専攻博士課程修了。博士(英米文学)。2010年～2011年オックスフォード大学客員研究員。現在、東北公益文科大学准教授。専門は歴史英語学、中世英語英文学、中世ヨーロッパ文学。主な共編著に『ことばと文学—池上昌教授記念論文集—』(英宝社、2004)、『梅檀の光—富士川義之教授・久保内端郎教授 退職記念論文集—』(金星堂、2010)、『文学の万華鏡—英米文学とその周辺—』(れんが書房新社、2010)、*The Katherine Group: A Three-Manuscript Parallel Text* (Peter Lang, 2011)、『チョーサーと中世を眺める—チョーサー研究会20周年記念論文集—』(麻生出版、2014)、『シチリア派恋愛抒情詩選—中世イタリア詞華集—』(論創社、2015)、*Sawles Warde and the Wooing Group: Parallel Texts with Notes and Wordlists* (Peter Lang, 2015)、『チョーサーと英米文学—河崎征俊教授退職記念論文集—』(金星堂、2015) その他がある。

## 完訳 中世イタリア民間説話集

2016年9月10日 初版第1刷印刷

2016年9月20日 初版第1刷発行

訳者 瀬谷 幸男

訳者 狩野 晃一

発行者 森下 紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1557-2 ©2016 Printed in Japan